

2つの映画に見る泰緬鉄道

さる日映画「レイルウェイ 運命の旅路」を観た。第2次世界大戦中タイ・ビルマ国境を越えて建設された鉄路にまつわる物語である。半世紀以上も昔、名匠デビッド・リーン監督の下にウィリアム・ホールデン、アレック・ギネス、早川雪州ら名優の演技に、名曲「クワイ河マーチ」の大ヒットが追い風となってアカデミー作品賞を受賞した「戦場にかける橋」はフィクションだった。一方、その後編と想起させるこの「レイルウェイ〜」は、日本軍捕虜となったイギリス人将校の自伝に基づいている。

今では当時の山岳鉄路は撤去され列車でタイからビルマへ行くことは出来なくなった。複雑な両国外交事情と乗客を期待出来ない鉄道の復活はならず、今日では歩いて国境越えすることも出来ない。タイ側はナムトゥクで、一方ビルマ(現ミャンマー)側はタンビザヤで行き止まりとなっている。

タイ側のナムトゥク手前のカンチャナブリーにはクワイ河に架かる昔の鉄橋が保存管理され、今では観光名所になって、休日になるとバンコックから観光客がどっとやってくる。ここには‘JEATH’と呼ばれる異色の戦争博物館があり、過酷だった当時の捕虜使役と虐待の様子を伝える復元模型が展示されている。一度は‘DEATH’(死)博物館というおどろおどろしい名称に決まりかかったが、仏教徒であるタイ人の気性にそぐわないと地元民から反発の声が上がった。建設に関わった日本、イギリス、オーストラリア、アメリカ、タイ、オランダのイニシアルを取って‘JEATH’と名付けられた。

一方ビルマ側では、30余年前タンビザヤに近いモールメンの空港税関長から、父親がかつて旧陸軍鉄道第五連隊に徴用され、その鉄道建設に携わったと聞いた。暫くして戦時のノスタルジックな幻想に触れてみたくなり、敢えて空路を避けラングーン(現ヤンゴン)から列車でサルウィン河畔の町へ行き、渡し船で濁流渦巻く大河を渡りモールメンで税関長のポンコツ車に揺られて昔の泰緬鉄路跡を訪れたことが懐かしい。2つの映画はいずれも日本軍の残虐さを描いているが、それでいて陰湿さがあまり感じられなかったのは、臨場感の落差なのか、時の経過のせいなのだろうか。